

平成 2 3 年 保 育 士 試 験 問 題


小 児 保 健

(選択式 20 問)

指示があるまで開かないこと

解答用紙記入上の注意事項

- 1 解答用紙と受験票の受験番号が同じであるか、カナ氏名・科目名・会場名・教室名を確認し、誤りがある場合は手を挙げて監督員に申し出ること。
- 2 漢字氏名を必ず記入すること。
- 3 解答用紙は、折り曲げたりメモやチェック等の書き込みをしないこと。
- 4 鉛筆またはシャープペンシル (HB～B) で、濃くはっきりとマークすること。

(良い例) …  (濃くマークすること。はみだしは厳禁)

(悪い例) … 

- 5 各問に対し、2つ以上マークした場合は不正解とする。
- 6 訂正する場合は、「消しゴム」であとが残らないように消すこと。

問1 次の文は、乳幼児の発育・発達の評価に関する記述である。最も不適切な記述を一つ選びなさい。

- 1 乳幼児の身体発育評価の指標として一般的に使われているのは、平成12年厚生省による調査の乳幼児身体発育値をもとにしたパーセンタイル値である。
- 2 肥満度は、学童期以降の体格を評価するのに用いられることもある。
- 3 カウプ指数は、主に幼児期に安定しているので、栄養状態を知るために便利な体形指数である。
- 4 DENVER IIスクリーニング検査は、成長評価を行うための検査の代表的なものである。
- 5 発達の評価は、それぞれの子どもの発達の問題を知るだけでなく、発達の特徴を理解し、適切な保育を行うために実施する。

問2 次の文は、健康な乳幼児の発達に関する記述である。適切な記述の組み合わせを一つ選びなさい。

- A 生後3～4か月頃、たて抱きで頭がぐらつかなくなる。
- B 生後6～7か月頃、何かにつかまって一人で立ち上がれるようになる。
- C 生後9～10か月頃、一人で走れるようになる。
- D 生後1歳頃、円を描けるようになる。
- E 生後3歳頃、三輪車をこいで動かすことができるようになる。

(組み合わせ)

- 1 A B
- 2 A C
- 3 A E
- 4 B D
- 5 C E

問3 次の文は、平成20年の日本の「人口動態統計」に関する記述である。最も適切な記述を一つ選びなさい。

- 1 妊産婦死亡率は、出産10万対9.2、出生10万対9.6であった。
- 2 乳児死亡率は、出生千対2.6であった。
- 3 合計特殊出生率は、1.66であった。
- 4 出生数は、1,314,006人であった。
- 5 全人口は、前年比約50万人の増であった。

問4 次の文は、「保育所保育指針」第5章「健康及び安全」の4「健康及び安全の実施体制等」の一部である。(A)～(E)にあてはまる語句の正しい組み合わせを一つ選びなさい。

- (1) 全職員が健康及び安全に関する共通理解を深め、適切な(A)と(B)の下に年間を通じて計画的に取り組むこと。
- (2) 取組の方針や具体的な活動の企画立案及び保育所内外の(C)の業務について、専門的職員が担当することが望ましいこと。栄養士及び看護師等が配置されている場合には、その専門性を生かして業務に当たること。
- (3) (D)と常に密接な連携を図るとともに、保育所全体の方針や取組について、周知するよう努めること。
- (4) 市町村の支援の下に、地域の関係機関等との日常的な(E)を図り、必要な協力が得られるよう努めること。

(組み合わせ)

	A	B	C	D	E
1	連絡	実行	連携	嘱託医	協力
2	連絡	協力	協力体制	嘱託医	連絡調整
3	分担	協力	連絡調整	保護者	連携
4	分担	実行	協力体制	嘱託医	連絡
5	対応	分担	連絡調整	保護者	協力

問5 次の文は、生後3か月児の健診で頭囲が大きめであることを指摘された時の乳児の頭囲に関する記述である。最も不適切な記述を一つ選びなさい。

- 1 他の身体計測値（体重、身長、胸囲）も大きめであれば、身体的にバランスがとれているので心配ないことが多い。
- 2 頭囲のみ特に大きめであれば、脳腫瘍や水頭症の可能性があり、早期診断・早期治療が大切である。
- 3 頭囲が大きめであれば、1週間に1回くらい頭囲を測定して急に大きくならないことを確かめたい。
- 4 必要に応じてCTスキャンなどの検査を行うことがある。
- 5 新生児仮死の後遺症としての脳性まひでは、頭囲が大きくなる。

問6 次の文は、脳の発育・発達に関する記述である。最も不適切な記述を一つ選びなさい。

- 1 脳幹は、生命の維持に必要な心臓、呼吸、体温調節などの機能をつかさどっており、出生時にほぼ完成している。
- 2 脳の重量は、生後急速に増加して、3歳で成人の約80%、6歳で約90%に達する。
- 3 乳幼児期の脳の重量の増加は、主として脳神経細胞の数の増加による。
- 4 脳神経細胞からでている突起（軸索）は、情報の受け渡しを担っている。
- 5 軸索は、髄鞘形成によって、情報をより早く、より正確に伝えるようになる。

問7 次の文は、乳幼児の生理機能の発達と保育に関する記述である。最も適切な記述を一つ選びなさい。

- 1 乳幼児では、成人と比べて体重当たりの体表面積が大きいため、低体温になりやすいので、成人より1枚以上多めの衣服を着せるように心がける。
- 2 3か月頃までの乳児では、鼻呼吸が中心であるため、鼻孔をふさがないように注意する。
- 3 脈拍数は、年齢が低いほど多く、乳児では150を超えるのが普通である。
- 4 乳幼児では、成人に比べ体水分量が多く、乳児では約70%、幼児でも約60%であるため、乳児の1日の体重1kgあたりの必要水分量は、成人の約2倍である。
- 5 母親から受け継いだ受動免疫は1か月頃でなくなるので、自身で免疫物質をたくさん産生できるようになるまでは、人ごみへの頻繁な外出はさけるようにする。

問8 次の文は、人の免疫系に関する記述である。最も不適切な記述を一つ選びなさい。

- 1 免疫系は、外界からの侵入物を排除したり、体内にできる異物を処理したりして、生体の防御機構に関与している。
- 2 免疫系が働くことによって、生体にとって必ず有利な結果をもたらす。
- 3 麻しんなどに罹り、そのウイルスを免疫系が記憶すると、再度感染しても速やかにウイルスを処理するため、通常二度と麻しんなどに罹らない。
- 4 もともとは自分の細胞であっても、がんのようにその性状を変化したものに対して、免疫系はそれを排除する。
- 5 免疫系を構成する成分は、おおまかにマクロファージ、リンパ球、好中球などの細胞成分と、抗体や補体などの液性成分からなる。

問9 次の文は、小児の生活習慣病予防のための食生活や食習慣に関する記述である。最も不適切な記述を一つ選びなさい。

- 1 料理を大皿に盛るのは避け、各自の必要な分を適切に食べられるようにする。
- 2 外食や加工食品は、栄養や味のバランスを考えて食事の中に適宜取り入れる。
- 3 塩分をひかえ、食材のおいしさを生かして、薄味に慣れさせる。
- 4 朝食、昼食、夕食、おやつなど、毎日ほぼ決まった時間に食べるようにする。
- 5 年少児では、家族や仲間と一緒に食べると集中できないので、なるべく一人で食べさせる。

問10 次の疾患は、節足動物媒介感染症である。「蚊」が媒介しない感染症の組み合わせを一つ選びなさい。

- A マラリア
- B デング熱
- C ライム病
- D 西ナイル熱
- E 発疹チフス

(組み合わせ)

- 1 A C
- 2 A D
- 3 B D
- 4 B E
- 5 C E

問 11 次の文は、乳幼児の事故への対応に関する記述である。最も不適切な記述を一つ選びなさい。

- 1 子どもが重症の場合では、他の職員に助けをもとめる前に、まず一人で処置をする。
- 2 5か月位から2歳位までの子どもでは手に触れたものは何でも口に入れようとするので、子どもの手の届く範囲から危険なものは取り除いておく。
- 3 風呂にふたをすることや子どもが屋外に勝手に出られないようにすることも事故の防止に効果がある。
- 4 安全な保育環境の整備をはかると同時に安全教育も大切である。
- 5 事故や災害で怖い体験をした後に、長期にわたって日常生活に障害を及ぼすことがあり、これをPTSD（心的外傷後ストレス障害）という。

問 12 次の文は、予防接種の副反応に関する記述である。最も不適切な記述を一つ選びなさい。

- 1 百日せき・ジフテリア・破傷風三種混合ワクチン（DPT三種混合ワクチン）の接種では、接種部位が接種翌日から1週間後にかけて発赤、腫脹、硬結をきたしやすいが、一般的には心配ないことが多い。
- 2 BCGワクチンの接種では、接種後10日くらいしてから針の跡に小さな発赤や水疱ができ、化膿することもあるが、その後小さなかさぶたになって、数か月後～数年後に消失することが多い。
- 3 麻しん・風しん混合ワクチンの接種では、接種後4日～2週間の間に発熱や発疹が数%～20%にみられる。
- 4 インフルエンザHAワクチンの接種では、接種部位が赤く腫れる程度で、発熱や頭痛などの副反応は少ない。
- 5 水痘ワクチンの接種では、健常者でも発熱や局所の発赤などの副反応がみられやすい。

問 13 次の文は、現在わが国で行われている予防接種に関する記述である。適切な記述の組み合わせを一つ選びなさい。

- A 平成6年の法改正により制度化された現行の予防接種制度では、定期予防接種は義務接種になっている。
- B わが国では、経口生ポリオワクチンを生後3か月から生後90か月にいたるまでの間にある者に接種している。
- C 小児に対するインフルエンザワクチンの接種は定期予防接種であり、集団接種することになっている。
- D 接種時に、「かぜ」などで発熱のある時には、定期予防接種を原則として受けられない。
- E BCGワクチンと経口生ポリオワクチンの接種間隔は2週間で良いことになっている。

(組み合わせ)

- 1 A B
- 2 A C
- 3 A D
- 4 B D
- 5 C E

問 14 次の文は、乳児に使用のおむつに関する記述である。適切な記述を○、不適切な記述を×とした場合の正しい組み合わせを一つ選びなさい。

- A 従来から使用されている布おむつは、洗濯して再利用できる。
- B 紙おむつは、尿を比較的多く吸収でき、外出時や睡眠中、または親が忙しい時などにも使用されている。
- C おむつ交換は、授乳の前後や起床時など、また尿や便でおむつが汚れた時などに、行うことが多い。
- D おむつ交換では、汚れている外陰部を濡れたガーゼなどで、きれいに拭き取ろうとすることは良いが、拭きすぎて傷つけたりしないように注意したい。

(組み合わせ)

	A	B	C	D
1	○	○	○	○
2	○	○	○	×
3	○	○	×	○
4	○	×	○	○
5	×	×	○	○

問 15 次の文は、乳幼児の症状や病気、看護に関する記述である。適切な記述の組み合わせを一つ選びなさい。

- A 発熱や下痢の症状があり、さらにおう吐があつて水分の摂取ができないときには、脱水症の危険があるので、医療機関を受診する。
- B けいれんが起こったら、あおむけに寝かせ、唾液やおう吐物が気管に入らないようにする。
- C 鼻出血は鼻をつまんで鼻中隔の方向に約 15 分間圧迫することで止血できる。
- D 発熱時は厚着をさせて、十分に保温できるようにする。
- E 生後 3 か月をすぎ、自由に寝返りができるようになると、乳幼児突然死症候群（SIDS）の心配がなくなるといわれている。

(組み合わせ)

- 1 A B
- 2 A C
- 3 A D
- 4 B D
- 5 C E

問 16 次の文は、わが国の先天異常に関する記述である。最も不適切な記述を一つ選びなさい。

- 1 生まれつき形態や機能の異常がある先天異常は、現在では、出生児全体の約1%にみられる。
- 2 形態の異常には、視診でわかる外表奇形と、検査しないとわかりにくい内臓奇形とがある。
- 3 平成元年以降では、乳児死亡の原因の第一位は先天異常である。
- 4 先天異常の原因としては、遺伝病、染色体異常、遺伝子の突然変異、子宮内の環境要因などがある。
- 5 複数の遺伝子と環境要因の相互作用による多因子遺伝病には、成人の生活習慣病に関連した病気も含まれる。

問 17 次の文は、乳幼児のう歯予防に関する記述である。最も不適切な記述を一つ選びなさい。

- 1 子どもは満1歳くらいになると、大人のまねをしたがるので、大人の歯みがきをまねさせるとよい。
- 2 1歳半をめやすに、哺乳瓶の使用は中止し、コップかストローで飲めるようになるとよい。
- 3 フッ化物の歯面塗布は、1歳6か月児歯科健康診査、3歳児歯科健康診査などで行えるとよい。
- 4 幼児が繊維性食品や硬い弾性食品を食べると、乳歯の表面に傷ができるので、食べない方がよい。
- 5 幼児期には、保育所、家庭などでの生活を通して、規則正しい食習慣、また歯みがきの習慣をつけられるとよい。

問 18 次の文は、小児の内分泌疾患に関する記述である。最も不適切な記述を一つ選びなさい。

- 1 内分泌臓器から血液中に分泌され、極めて微量で特定の効果を発揮するホルモンは、少なすぎ（分泌不全）でも多すぎ（過剰分泌）でも、内分泌疾患を発生させる。
- 2 特発性の成長ホルモン分泌不全性低身長症は、2～3歳ころまで、やや小柄ながらも普通に発育することが多いが、その後は体重、身長伸びが極端に少なくなる。小学校低学年ころまでに発見して、成長ホルモンの皮下注射による治療を長期間続けることによって身長伸びが期待できる。
- 3 先天性甲状腺機能低下症は通常、新生児マススクリーニングによって発見、治療されているが、甲状腺ホルモン薬を一生服用すること以外、一般的には普通の人と同じ生活ができる。
- 4 甲状腺腫や眼球突出などの症状がみられる甲状腺機能亢進症に対しては、通常、手術または放射線治療を行う。
- 5 先天性副腎過形成症は、通常、新生児マススクリーニングによって発見され、不足するホルモン薬を投与して治療する。

問 19 次の文は、B型肝炎に関する記述である。不適切な記述の組み合わせを一つ選びなさい。

- A B型肝炎ウイルスのHBs抗原とHBe抗原には、ともに感染性がある。
- B B型肝炎母子感染防止事業が昭和60年より実施されている。
- C B型肝炎ウイルスはグルコン酸クロルヘキシジンで不活化できる。
- D B型肝炎ウイルス・キャリア妊婦から生まれた新生児に対しては、まず第一に出産後48時間以内に抗HBヒト免疫グロブリン（HBIG）の注射が行われている。
- E B型肝炎ウイルス・キャリアの母親の母乳中には、B型肝炎ウイルスが含まれていることがある。

(組み合わせ)

- 1 A B
- 2 A C
- 3 A D
- 4 B D
- 5 C E

問 20 次の【症例】を読んで、【設問】に答えなさい。

【症例】 3歳、男児

某月某日 鼻汁、咳嗽など「かぜ」のような症状が出はじめた。その後、次第に咳が強くなってきた。約4週間たってから、咳がはげしくなり、連続的に咳き込み、そのあと息を吸うときにフューという音が出た。咳の発作は夜間に強く、咳き込みに伴いおう吐もみられた。また、チアノーゼ、顔面紅潮、眼瞼浮腫などもみられた。

【設問】 この患児の診断名を一つ選びなさい。

- 1 喘息性気管支炎
- 2 百日咳
- 3 マイコプラズマ肺炎
- 4 「かぜ」症候群
- 5 肺結核